

(1) 活動概要

- ・福山市初の義務教育学校である福山市立鞆の浦学園を視察し、教科・学年の枠を超えたカリキュラム編成や特設教科「鞆学」について学ぶ。
- ・教職員が一つの組織となり、9年間の一貫した教育を行う組織づくりについて、聴取。

(2) 小中一貫教育・義務教育学校に関する視察、聴取、談話内容

① 小中一貫カリキュラムについて

福山市鞆の浦学園のカリキュラムマップには、育成する21世紀型“スキル&倫理観”として、課題発見・解決能力、情報活用能力、コミュニケーション能力、郷土愛と、4つの育成する力が位置付けられ、特設教科「鞆学」を中心に教科と領域が配置されている。また、教科の中でも異学年交流や異学年合同授業が仕組みられ、義務教育学校の特色を生かしたカリキュラム編成がなされている。

SDGsが教科や領域、鞆学にも位置付き、9年間を通して繰り返しSDGsの観点とつなげて学習し続けることができる教科横断的な学習内容となっている。

② 特設教科「鞆学」について

鞆学は、「福山ふるさと学習」として、「地域を素材とした課題発見・解決学習を通して、世界に視野を広げ、社会のために実践する力を育むこと」をねらいとしている。前期での学びを整理・分析し、後期では、今まで学習したことや身に付けた力を使い、地域活性化・魅力発信を行っている。「鞆について学ぶ」ではなく、「鞆を使って学ぶ」ことに重点を置いており、身に付けさせたい資質・能力の育成を図るために鞆の浦の人的・物的資源や事柄を活用する学習内容である。特に、地域の方をゲストティーチャーとして活用し、話を伺うだけでなく、自分の探究テーマにあった活動内容に合わせ、地域の方と協力し、提案を行ったり、商品の開発を行ったりしている。SDGsの「つくる責任 つかう責任」と関連させ、福山デニムを使って服を作り、福山と福山デニムをアピールする探究活動など、自分の探究テーマが実際に企業と共同することで商品化を目指すことから、児童生徒にとってよりふるさとを実感できる学習内容であるだけでなく、主体的・対話的で深い学びを行うことができる学習となっていることが分かった。

③ 談話内容から

8年生生徒に話を聞いた。鞆の浦学園では、異学年交流が日常的に行われており、上級生が下級生の手本になろうとする意識が高い。鞆学では、8・9年生の異学年でグループを組み、共に教え合いをしながら自己課題の探究を行っている。この生徒も「私も先輩に教えてもらいながら、学んできたので…」と異学年交流のよさを語っていた。学校経営方針には、「義務教育学校のよさを最大限に生み出すこと」とあり、義務教育学校9年間の一貫した教育をさらに推進して、将来の日本やふるさと福山を支え貢献する人材の育成のねらいに近づいていると感じた。上級生が下級生の手本になろうとする意識の高まりや、下級生の上級生に対するあこがれの醸成など、相互効果が生まれていると感じた。

④ 授業の様子から

1年生の鞆学では、鞆の磯に出かけたとき、貝やシーグラスなど海にしかないものがあることを知り、それを他の県の小学校に伝えよう、という授業を行っていた。カリキュラム上にはない授業であり、子どもの発言や授業態度から、他県の児童との交流へと発展したものだと思われる。福山城主と関係のある題材を選び、見

童にとって必然性のある活動となっていたことから、カリキュラムは弾力性のあるものであり、柔軟に対応させていく必要があると学んだ。

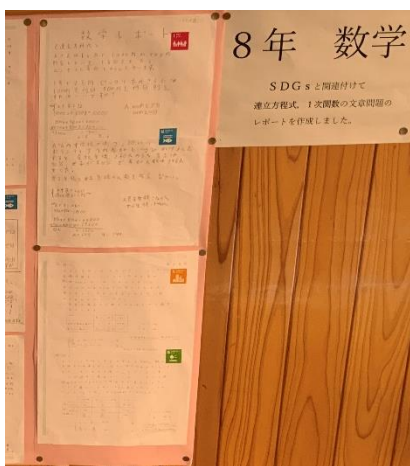
廊下掲示は、学年の学習に関わるものが掲示されていた。1年生から9年生まで廊下掲示を見ると、学年でどのような学習をしているのか学ぶことができるのも、義務教育学校のよさであると思う。



<1年生板書の様子>



<1年生から9年生までの読書年表>



<8年生数学とSDGsが結びついた廊下掲示の様子>



<1年生の授業の様子>



<資質・能力についての掲示>

### ⑤ 小中教員の連携

研究会の時に紹介していただいたのが、「教職員の心得八か条」である。小中の教員文化が違う中、一緒に活動をしていくことは、とまどいが生じる。鞆の浦学園では、職員室の柱に8か条を貼り、教職員が毎日見ることができるようにしていた。小中教員の意識の違いを認め合う中で、互いを尊重し、歩み寄ろうとする姿を見ることができた。それ以外にも、義務教育学校になる以前から、小中の教員が集まり、カリキュラムマップを作成していることから、共通の目標に向かって協働して取り組む過程も大事にする必要があると学んだ。

### (3) 今回の視察を通して

勤務している北方町では、令和5年度に義務教育学校が開校する。今年度には、北方小学校と北方中学校の職員室が一緒となり、校舎も小中でつながる。ただ義務教育学校が開校するのを待つのではなく、鞆の浦学園のように、開校に向けて既存の組織を活用しながら、小中の教員が協働して活動できる場を仕組んでいくことが、小中の教員の連携にもつながる。北方町でも活用することができるように、学んだことを提案していきたい。また、自分の研究テーマに生かしていきたい。

